

## 解放前チベット農奴制の状況と解放の効果について（2）

### 大 西 広

#### Ⅳ 農奴制解体を導いた商工業の発展について

ここではまず、前稿で残した課題のうち①農奴制解体を導いた商工業の発展が特に20世紀前半期にあったことに関わるデータ分析の結果を示す。

##### 1 那曲地区1731-1959年データによる推計

その最初のデータは、格勒他（1989）の46-47ページの間に挟まれた表のデータで、直接に商工業の発展を示すものではなく、ただ、チベット那曲地区の長期にわたる「族」の戸数の変化のみを表したものでしかない。しかし、元表をそのまま示した第2表にあるように1731年に始まる非常に長期のデータとして意味が大きい。我々はこの表のうち戸数データのみ注目するので、1942年の部分は利用できないが、1731年、1924年、「1959年前」の3時点の間の各「族」の戸数変化率を戸数規模別に推計できる。そして、この「族」が現代的な意味での「村」であるとすると（その仮定は正しい）、これは大きな村と小さな村のどちらがより速く戸数（人口）を増やしたかが分かる。

我々の知りたい事柄からいけば、もし大きな村ほどこの戸数成長率が高いとするなら、それはおそらく広義の「都市化」によってそれらの村に商工業者が増大したことを反映している。逆の場合には逆の傾向を反映していることになろう。こうして、戸数成長率の戸数規模別変化率の分析は、都市化ないし商工業の発展の指標として有効であり、それを計算してみた、とい

うのが次の第1図と第2図である。

なお、この第2表では1731年、1924年、「1959年前」の3時点のデータであっても戸数が書き込まれているものと書き込まれていないものがあるので、1731年-1924年期間の変化も、1924年-「1959年前」期間の変化も、もちろん数字が揃うもののみで計算している。前者の場合は16、後者の場合は27であった。また、「戸数規模」はそれぞれ1924年、「1959年前」の数字をとっている。

そうすると、問題はその結果の分析となるが、それは見られるように、

1731年-1924年期間 どちらかと言えば右上がり＝「村」間の規模格差の縮小

1924年-「1959年以前」期間 どちらかと言えば右上がり＝「村」間の規模格差の拡大  
 となっていることが分かる。すなわち、1924年以前には商工業部門の成長による「村」間格差の拡大はなかったが、1924年以降にはそれが見られるようになった、との理解である。

##### 2 貿易データからの「市場化」程度の推測

しかし、以上の方法も、時期区分が荒く、これだけでは1924以前に「市場化」＝「商工業の発展」がなかったということはできない。そして、そのために、次に「市場化」をインドとの貿易量の推移から推測するという方法をとりたい。それは、陳（2008）にインド国境東亜税関を通過した輸出入総額のデータが1889年から1910年に至る期間について示されており、また、チベットにおける商品流通で相当大きな比重を占める茶の輸入量の変化も1928-1938年期間につ

第 2 表 那曲地区「夥爾 39 族」戸数近 230 年の変遷及び分布状況

序号	(18 世纪 30 年代初至本世纪 50 年代末)				1942 年	1959 年前	今县属
	1731 年	1924 年	1942 年	1959 年前			
	《卫藏通志》	《西藏志》	《霍尔卅九部简史》	《木朗年清册》	《水马年清册》(宗属)	(有关资料)	属部
1	纳克书贡巴族	纳克书贡巴	ནག་ཤོད་ལུ་མལ་པ	འགྲུ་མ(315 戸)	འགྲུ་མ་ཤོག	比 果木休(375 戸)	6 比如县
2	纳克书毕鲁族	纳克书异(毕)鲁	ནག་ཤོད་འབྲི་བུ	འབྲི་བུ(323 戸)	འབྲི་བུ	比 比如(323 戸)	4 比如县
3	纳克书奔盆族	纳克书奔盆	ནག་ཤོད་པོ་མལ་པ	པོ་མལ་པ(117 戸)	པོ་མལ་པ	比 彭盼(117 戸)	2 比如县
4	纳克书达格鲁族	纳克书达格鲁克	ནག་ཤོད་ཏུ་ཁེ་ལུ	ལྷ་གྲུག(232 戸)	ལྷ་གྲུག(ལྷ་གྲུག)	比 达珠(303 戸)	比如县
5	纳克书拉克族	纳克书拉克什	ནག་ཤོད་ལ་མེ	ལ་གྲི(385 戸)	ལ་གྲི(ལ་གྲི)	比 热西(385 戸)	比如县
6	纳克书色尔扎族(以上六部共 1081 戸)	纳克书色尔查	ནག་ཤོད་མེ་ཁྲ	ཁྲ་འིང(414 戸)	ཁྲ་འིང(མེ་ཁྲ)	比 查仁(413 戸)	4 比如县
7	札麻族(81 戸)	扎麻尔	རྩ་མཚན(81 戸)	རྩ་མཚན(239 戸)	རྩ་མཚན	聂 杂玛尔(300 戸)	聂荣县
8	阿扎族(49 戸)	上阿扎克	ཡར་གྲུག(49 戸)	ཡར་རྫོང(88 戸)	ཡར་རྫོང	聂 阿堆(202 戸)	聂荣县
9	下阿扎族(48 戸)	下阿扎克	ཡར་རྫོང(48 戸)	ཡར་རྫོང(133 戸)	ཡར་རྫོང	聂 阿美(209 戸)	聂荣县
10	[无载]	夥尔孙提麻尔	(?)	(?) [མོག་ལྷོ(356 戸)]	མོག་ལྷོ	聂 索德(1000 戸)	4 聂荣县
11	夥尔川桑族(42 戸)	夥尔川桑	རྩ་མཚན(42 戸)	ལྷོ་མཚན(209 戸)	ལྷོ་མཚན	尺 冲仓**	巴青、丁青
12	夥尔扎麻苏他尔族(16 戸)	夥尔扎麻苏他尔	རྩ་མཚན་ལོ་མེ(16 戸)	མོག་ལྷོ་ལྷོ་མེ(37 戸)	ལྷོ་མེ	尺 斯希塔	丁青县
13	夥尔扎麻苏他尔只多族	夥尔扎麻苏他尔只多	རྩ་མཚན་ལོ་མེ་གྲི་ལྷོ	ལྷོ་མེ [ལྷོ་མེ(58 戸)]	尺 赤如(80 戸)	尺 赤如(80 戸)	索县
14	(夥尔扎麻苏他尔)瓦拉族(以上四部共 77 戸)	(夥尔扎麻苏他尔)娃拉	རྩ་མཚན་ལོ་མེ་ལ་ལ	(?) [ལྷོ་མེ(77 戸)]	尺 朵巴(77 戸)	尺 朵巴(77 戸)	索县
15	夥尔族(122 戸)	夥尔	རྩ་མཚན(122 戸)	(?) [འགྲུ་མ་ཤོག(636 戸)]	འགྲུ་མ་ཤོག	巴 朱雪(855 戸)	16 巴青县
16	麻鲁族	嘛鲁	དམར་རུ	དམར་རུ(215 戸)	尺 玛如	尺 玛如	丁青县
17	宁塔	宁塔	ཉིན་མ	ཉིན་མ(55 戸)	尺 宁塔	尺 宁塔	丁青县
18	尼札尔	尼查尔	ལྷོ་མཚན(?)	(?)	尺	尺	丁青县(?)
19	参麻布玛(以上四部共 213 戸)	参麻布玛	ལྷོ་མཚན(213 戸)	(?)	尺	尺	丁青县(?)
20	尼牙木札族	尼牙木查	ཉི་མོ་ལྷོ་མཚན(?)	ཉི་མོ་ལྷོ་མཚན(52 戸)	尺 嫩查(85 戸)	尺 嫩查(85 戸)	索县
21	利松麻巴族	利松麻巴	ཉི་མོ་ལྷོ་མཚན(?)	ཉིན་མ(ལྷོ་མཚན(26 戸))	尺 热松木(45 戸)	尺 热松木(45 戸)	索县
22	勒达克族	勒达克	ལེ་ཏུ་ལ	ལེ་ཏུ་ལ(འབྲི་བུ(38 戸))	尺 质达(46 戸)	尺 质达(46 戸)	索县
23	多麻巴族	多麻巴	རྩ་མཚན	རྩ་མཚན(38 戸)	尺 顿巴	尺 顿巴	丁青县
24	羊巴族(以上五部共 206 戸)	羊巴鄂尔	རྩ་མཚན(?)	{ཡར་པ(34 戸)} {ལྷོ་མཚན(188 戸)}	尺 央巴(35 戸)	尺 央巴(35 戸)	索县
25	夥尔族(66 戸)	夥尔	རྩ་མཚན(66 戸)	བྱུག་ལྷོ(165 戸)	巴 竹居(209 戸)	巴 竹居(209 戸)	8 巴青县
26	住牧依戎地方霍尔族(139 戸)	(?)	ཡེ་རྩ་མཚན(131 戸)	ཡེ་མ(366 戸)	巴 益塔(595 戸)	巴 益塔(595 戸)	12 巴青县
27	夥尔族	(?)	(?)	(?)	巴		巴青县
28	彭他麻族	夥尔彭他吗	པོ་མཚན	པོ་མཚན(162 戸)	巴 本塔(289 戸)	巴 本塔(289 戸)	4 巴青县
29	夥尔拉寨族(以上三部共 53 戸)	夥尔拉寨	ལ་མེ་རྩ་མཚན(53 戸)	(?)	巴	巴	巴青县
30	上刚噶鲁族	上刚噶鲁	རྩ་མཚན		(1916 年分别并入本表第 11、16 号部落中)	(不详)	丁青县
31	下刚噶鲁族(以上二部共 149 戸)	下刚噶鲁	རྩ་མཚན	ལྷོ་མཚན(185 戸)			丁青县
32	琼希拉克鲁族(497 戸)	琼希拉克鲁	ལྷོ་མཚན(497 戸)	ནག་ལྷོ(730 戸)	丁 那如	丁 那如	丁青县
33	噶鲁族(1004 戸)	噶鲁	(དཀར་རྩ་མཚན་ལྷོ་མཚན(1004 戸))	དཀར་རྩ་མཚན(954 戸) དཀར་རྩ་མཚན(448 戸)	丁 噶堆 丁 噶麦	丁 噶堆 丁 噶麦	丁青县 丁青县
34	色尔扎族(687 戸)	巴尔查	ལྷོ་མཚན(687 戸)	ལྷོ་མཚན(524 戸) ལྷོ་མཚན(516 戸)	色 恰色 色 嘎尔康	色 恰色 色 嘎尔康	均在丁青
35	上多尔树族	上多尔树	རྩ་མཚན	རྩ་མཚན(121 戸)	丁 多尔虚堆马	丁 多尔虚堆马	丁青县
36	下多尔树族(以上二部共 137 戸)	下多尔树	རྩ་མཚན	རྩ་མཚན(150 戸)	丁 多尔虚买玛	丁 多尔虚买玛	丁青县
37	三扎族(32 戸)	三渣	ལྷོ་མཚན(32 戸)	ལྷོ་མཚན(51 戸)	比 森康(70 戸)	比 森康(70 戸)	比如县
38	朴族族(27 戸)	朴俗	བྱུག་ལྷོ(27 戸)	བྱུག་ལྷོ(77 戸)	比 布作木(103 戸)	比 布作木(103 戸)	比如县
39	三纳拉巴族(50 戸)	三纳拉巴	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)
40			以上藏文对称,自《霍尔三十九部简史》,疑为 38 族,4776 戸,设第 10 号部落(夥尔孙提麻尔)为 113 戸,则部落数、戸数可合,男妇一万七千六百六名口”。见《西藏志·外蕃》、《卫藏通志·部落》。	ཉིན་མ(32 戸)	ཉིན་མ	尺 宁木	丁青县
41				དམར་རྩ་མཚན(81 戸)	མཚན	尺 玛荣(63 戸)	巴青县
42				(?)	(?)	尺(?) 玛通	丁青县
43				ནག་ལྷོ(81 戸)	ནག་ལྷོ	比 那若(100 戸)	比如县
44				ལྷོ་མཚན(16 戸)***	(?)	巴 (?)	巴青县
45				ལྷོ་མཚན(107 戸)	ལྷོ་མཚན	比 格木(220 戸)	聂荣县
46				ལྷོ་མཚན(70 戸)	ལྷོ་མཚན	比 巴乌(230 戸)	聂荣县
47				ལྷོ་མཚན(119 戸)	ལྷོ་མཚན	比 百日(80 戸)	安多县
48				ལྷོ་མཚན(16 戸)***	(?)	比 (?)	比如县
				49 [ལྷོ་མཚན]	[ལྷོ་མཚན]	洛所(125 戸)	聂荣县
				50 [ཡར་པ]	[ཡར་པ]	雅安**	巴青县

出所) 格勒他 (1989) 46-47 ページ。

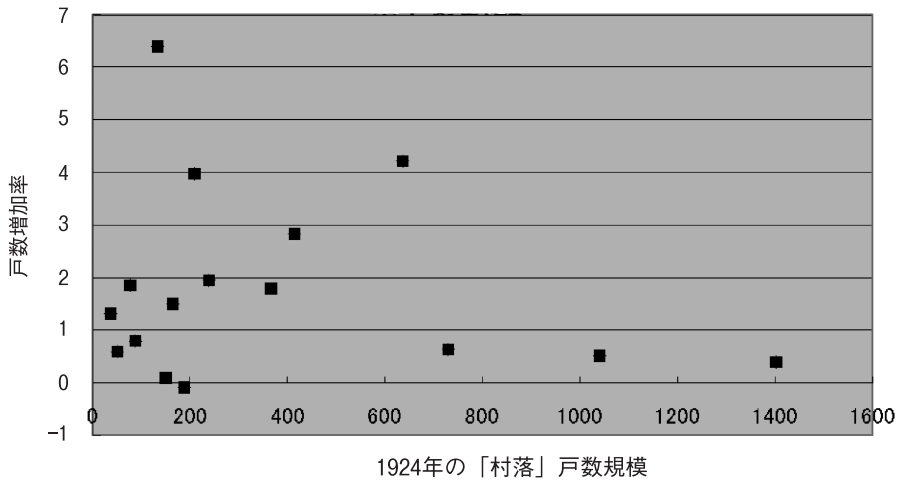
备注:  
 ①本表的部落排列,取《卫藏通志》中的次序,以便对照;  
 ②凡加方括号的,是我们的考订意见,带圆括号的藏文为异写名称;  
 ③“宗属”一栏中,各简称分别代表比如宗、聂荣宗、尺族宗、巴青宗、丁青宗、色扎宗、(索宗)。

\* 藏文原注:该部落不隶于官府、寺院或贵族;  
 \*\* 冲仓部落划入巴青的部分和雅安部落合计 135 戸。  
 \*\*\* 根据藏文原注,第 44 号属于第 15 号;第 48 号是“纳克书”的一个属部。

以上共 44 部, 8302 戸。详见《西藏文史资料选辑》第五辑。

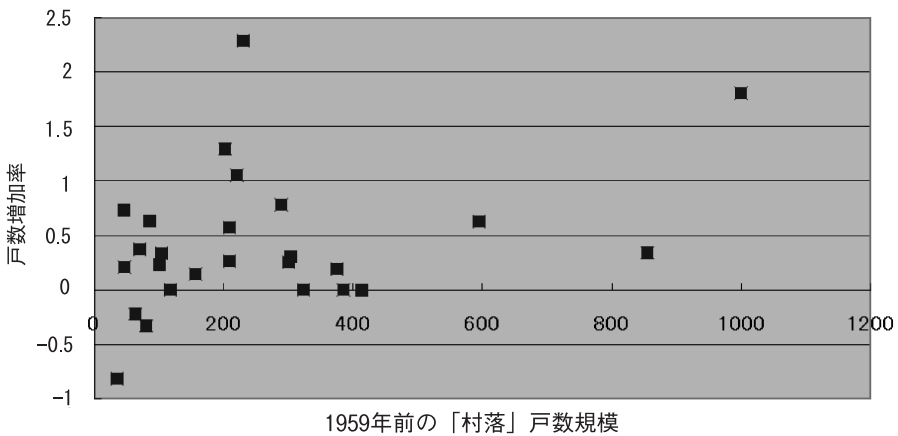
以上 40 部(不包括末尾的两个),共 9117 戸。见《霍尔三十九部简史》。

以上 45 部中,除了今属丁青县的部分外,其余的(今属那曲地区者)31 部,计 7629 戸。据那曲地委统战部、地区政协提供的有关材料对列。



第1図 「村落」戸数規模と1731-1924年期間増加率との相関

出所) 第2表から計算。



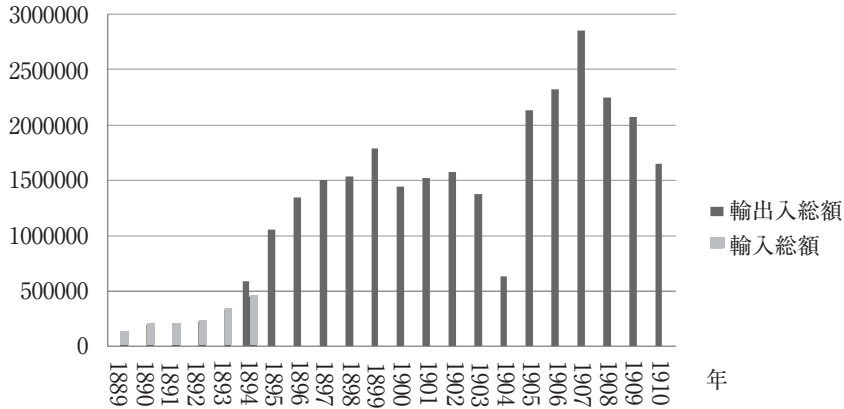
第2図 「村落」戸数規模と1924-1959年前期間増加率との相関

出所) 第2表から計算。

いて示されているからである。

それで、まず第3図は亜東税関を通過した英領インドとの貿易を示しているが、陳（2008）441 ページの原表から利用したのは「輸出入総額」の系列のみで、図中の「輸入総額」は実は440 ページ本文中に示された数字である。この数字は輸入額しか示していないので、「輸出入総額」と単純に比較することはできないが、それでも1889-1894年の間には少なくとも倍の規模には輸出入が増大したと考えられること、それがさらに1890年代後半には一段と大きくな

り、また1905-09年頃にはもう一度の増大を見られるというように段階的に拡大したことが見てとれる。なお、1904年はヤングハズバンド率いるイギリス侵略軍が亜東税関から侵入した年で、これが貿易量の縮小を招いているが、その侵略軍がラサに入って一旦実効支配を確立したことがその後の貿易量の一段の拡大をもたらしている原因である。このイギリスの実効支配は後に解消されるが、それでもこれが市場経済化の促進に役立ち、よって農奴制の解体を進めたことは意義深い。ちょうどこの時期が、前稿で問題



第3図 英領インドからの貿易額の推移 (ルピー)

出所) 陳 (2008) 441 ページの表および 440 ページ本文の数字



第4図 インドからの茶の輸入総額 (円)

出所) 陳 (2008) 555 ページの表

となった農奴制解体の本格化の時期と理解されるからである。

しかし、本稿で先に見た「村」の戸数変化の傾向分析では1924年以降こそが決定的な「市場経済化」の時期と解釈された。そして、その意味では、英領インドからの茶のみの輸入量にすぎないが、陳 (2008) 555 ページの1928-1938年期間のデータが意味を持つ。次の第4図がそれをグラフ化したものであるが、1938年時点で1928-31年頃の5倍に拡大しているのだから、この時期の「市場経済化」のスピードが特別に速かったことを否定できない。茶はバター茶を毎日飲むチベット族の必需品であって単なる1商品ではない。中国本土との間の貿易としても

チベットが馬を輸出し代わりに茶を輸入するという「茶馬貿易」が歴史上の基本的な形態であった。その茶貿易がここまで急速に進むには相当急速な市場経済化がなければならなかったはずである。これは第3図が示した世紀転換期のスピードを超えるものであったと考えられる。

また、関連でいうと、郭 (2008) の508ページに示された以下の第3表も極めて興味深い。麵を中心とする「糧食類」の輸入量にすぎないが、総貿易量に占める割合が記されているため、「抗日戦前数年」から1941年までの間の総貿易量の変化を追えるからである。この表から総貿易量を逆算すると、「抗日戦前数年」には39万元、1939年には84万元、1940年には227万

第3表 「抗日戦前数年」から1941年までのチベット「糧食類」輸入の変化

年 代	輸入量	総 額	総輸入に占める割合	備 考
抗日戦前数年	200000斤	14万元	36%	丁徳明の統計
1939年	200000斤	40万元	47.6%	郭卿友推計
1940年	2500000斤	175万元	77%	
1941年	7000000斤	700万元	86%	1-9月期間のみ

出所) 郭 (2008) 508ページ

元、1941年には814万元となり、この数字は信頼できる。主要貿易品としての茶の1938年の輸入量が25万元超でほぼオーダーが合うからである。そして、もしそうすると、重要なのは、1940年前後からの総貿易量のより一層の急拡大である。実をいうと、多杰才旦(2005)292ページには1950年代における大規模な農奴制の解体现象が述べられている。当初400あった貴族層がこの期間に200に半減したというのである。上記推計はこの議論を強くサポートする数値であると考えられる。1959年に至る直前には、それほど急速にチベット農奴制が解体の最中にあったこととなるのである。

## V 農奴解放評価のための収穫逓減技術の抽出について

しかし、こうして商工業の発展＝市場経済化の進展が農奴制の解体を進めていたとしても、農業部門の技術が収穫逓増的であったのか逓減的であったのかが分からないと、農奴制の後に「農地解放」＝小農創出をしたのが正しかったのか、それともいきなり「社会主義的」ないし「資本主義的」な大農経営をするのが正しかったのかを判断することはできない。それ故、ここでは、農業部門の収穫率（rate of return）の推計を行う。

もちろん、ここで筆者が抽出したいと考えるのは、この当時における収穫逓減技術である。なぜなら、この場合、市場経済化による農奴主

の農奴に対する支配力が低下しているとはいえ、それでも、もし農業生産が収穫逓増的であれば小農は駆逐され、大規模な荘園のみが生き残ることとなるからであり、この技術条件のもとでは農奴解放＝小農育成策は生産力的に見て有効な帰結をもたらさなかったはずだからである。逆に言うと、収穫逓減技術のもとで初めて、市場経済化が大規模農業＝大規模荘園を自然にも解体し、また強制的な農奴解放もまた生産力的に進歩的な役割を果たせることとなる。この趣旨による収穫率の推計であることを理解されたい。

### 1 那曲地区1956年データによる推計

そこでまず、分析を行うのは、呉(1990)と姚(1990)の中で示された数は少ないが、牧区である那曲地区のデータである。これは、本稿前節前半で「市場化」を検討したのがこの地区であったのがひとつの理由、また、「解放」に3年先立つ1956年のデータが示されているのがひとつ、そして、最後に、まだ人口増による牧地の競合がない場合、投入要素が労働力のみとなるという意味で分析が単純であるからである。つまり、労働力の投入増にしたがって、一人当たりの生産が増えるのかどうかという二次元のグラフを描いて検討するということになる。呉(1990)と姚(1990)が示している那曲地区の牧場データは次の第4表に示している。

見られるように、これらの牧場はすべて外部から労働力を雇用して経営しているので、各牧

場の労働力数はそれらも追加したものとなっている。また、自家労働力が細かな数字となっているのは、そもそものデータがこのように細かく労働力をカウントしているためである。牧場数が8で少なく、かつまた「総収入」データの得られたのは5つにすぎないから限界が大きい。それでもここで得られた5つの「追加雇用後の労働力数」と「総収入/追加雇用後の労働力数」をグラフにすると第5図に見るように「収

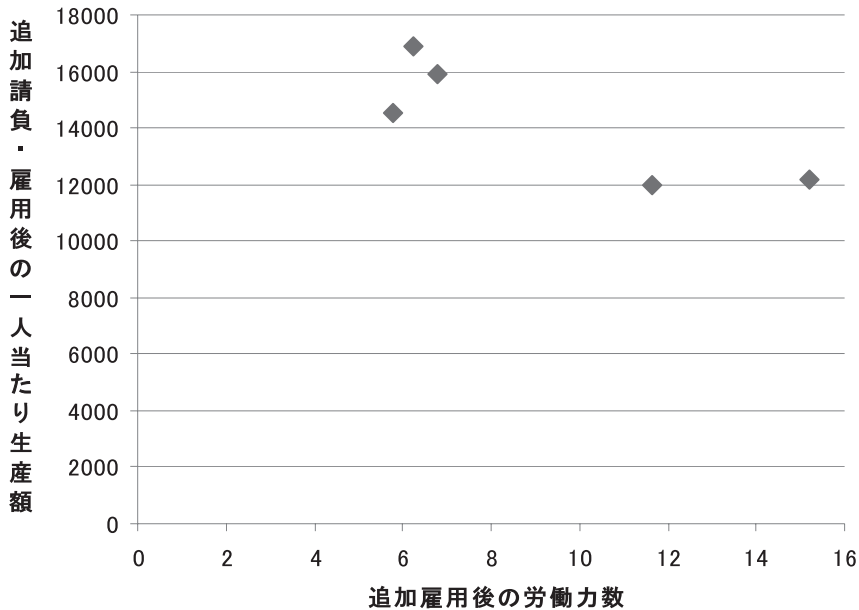
穫逡減」であることが予想できる。サンプル数がこれだけ少なくても「相関係数がマイナスでない」との帰無仮説の検定において p 値は 0.068667 となった。5%水準では有意とはならないが、それに近いレベルで「収穫逡減」を予想しうることを示している。

2 四川省理化濯桑墾区 1930 年代データの検証  
しかし、もちろん、より重要なのは農業部門

第4表 1956年那曲牧区データにおける投入労働力と生産額

牧場名	自家労働力	追加雇用後の労働力数	総収入(元)	総収入/追加雇用後の労働力数
奔倉	0.38	15.22	184823	12143
索加倉	0.5	11.65	139699	11991
烏金倉	0.5	6.78	107755	15893
才扎木	1.17	6.25	105632	16901
巴達	1.5	5.76	83638.1	14521
那仁	0.5	4.16		
興仁	0.25	4.31		
多爾果	1.85	4.74		

出所) 呉(1990) および姚(1990)



第5図 1956年那曲牧区データにおける「収穫逡減」

出所) 第4表と同じ。



第5表 四川省理化灌桑壘区1930年代データにおける投入労働力と生産額

地区名称	男	女	壮丁	学童	毎年納糧額
甲墨	23	67	3	21	9.7
俄曲	20	52	2	21	7.43
卡拟	10	35	1	10	2.92
甲得	20	80	5	10	6.33
格虾	17	25	10	10	6.1
作那	18	26	10	15	5.8
夷君	18	29	10	11	6.1
谷中	15	18	6	3	7.6
不嗟	18	21	5	8	7.3
墨打	20	26	7	5	3.1
汝庄中	5	13	2	3	4.1
汝馬中	8	10	3	5	4.1
下勒	6	19	3	5	1.7
上崗	11	16	6	0	3.6
龚坝	17	35	4	3	7.8

出所) 張 (2004) 364-5 ページ。

における検証であり、筆者はいくつかの方法でその技術特性の検証を行った。その主たるものは、1959年の農奴解放前後に全面的に行われた農村調査をまとめた全6巻の西藏社会歴史調査資料叢刊編輯組『藏族社会歴史調査』(西藏社会歴史調査資料叢刊編輯組編集、西藏人民出版社出版、1987-89年)で農業生産、労働力、土地面積などの経営データが揃っているものの分析である。これによって複数生産要素を使用する生産関数推計が可能となり、それが最も適切な分析と言える。しかし、その分析に先立って、こうした「藏族社会歴史調査」の四川省康西地区調査(1930年代実施)をまとめた『康区藏族社会歴史調査資料輯要』(趙・秦(2004))から分析可能なデータを探してみた。それは、趙・秦(2004)に収められた張子恵「理化灌桑壘区調査記」という論文<sup>1)</sup>の364-365ページが示す四川省理化灌桑壘区の納糧額(納税額)データである。これは、2要素データしか持たないもの

の、単位毎の詳しい労働力数が分かり、「生産額」に代わって我々が利用する「納糧額」(納税額)データの利用も以下の意味で有意義であると思われるからである。

まず、そのデータは、次の第5表で示している。見られるように「経営体単位」というより「部落単位」=「荘園」単位のデータであるのも特徴で、結果として総計698人というかなり大きな地域のデータが得られたこととなる。また、男女の別、学童の数、壮丁の数も明記されていて、人数で各単位の規模を測る際には最適である。以下では、総人口から学童数を引いた「成年人口」と「壮丁数」を規模データとし、また、個々の単位の「納糧額」を「生産額」の

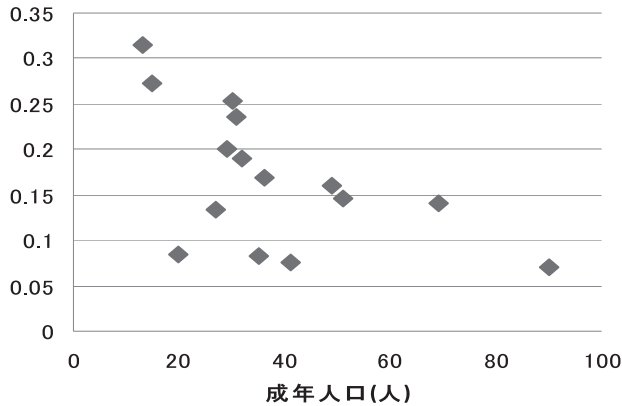
1) この論文は元々『康導月刊』第1巻、第12期(1940年)で発表されたものである。調査年が明示されていないが、1939年調査の可能性が高い。ただし、本稿では「1930年代データ」とした。

代理変数と想定した。その結果得られた経営規模と「納糧額」との相関関係は以下の第6、7図のとおりである。

見られるとおり、経営規模を人数で計る場合、「大規模」であればあるほど規模当たりの「納糧額」は明確に減少している。そして、それは規模に関する収穫逡減傾向のあることを示していると考えられるのである。また、この「壮丁」を兵役などの負担義務として理解した場合、つまり、これ自体も一種の現物形態の「納税」とであると理解した場合にも、この傾向は確認できる。というのは、図示はしないが、第5表のデータは、成年人口当たりの壮丁数が壮丁数の増に

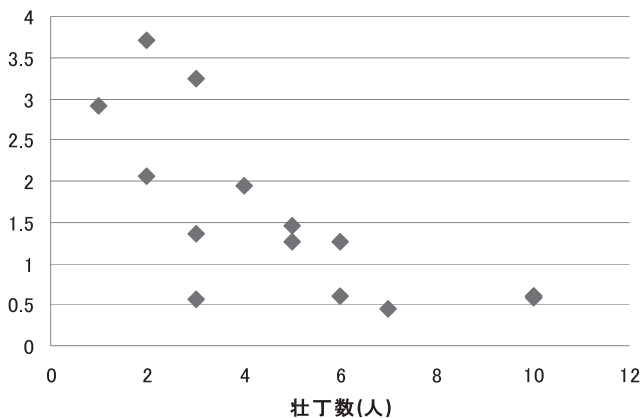
ともなって低下していることを示しており、それは「納税」としての「壮丁」もまた規模毎に低下していることを示しているからである。つまり、「納糧額」も「壮丁」も規模の増大とともに逡減しているからである。

もちろん、この結果は直接に「生産額」をとったものではないので、本当のところ技術的にも収穫逡減であったと明確に言い切れるわけではないが、それでも逆に、「政府にとっては」収穫逡減であったこととなる。つまり、現物・兵役・金納などの諸形態をとる政府の税源確保にとってはすでにこの時点で「農奴制」は好ましからざるものとなっていたのである。本稿(1)では、



第6図 成年人口当たり納糧額

出所) 趙・秦(2004) 364-365 ページのデータより作図



第7図 壮丁数当たり納糧額

出所) 趙・秦(2004) 364-365 ページのデータより作図



20世紀初頭に清朝政府とチベット中央政府が農奴制の解体を促進したと述べたが、その直接的意図はここにあったと理解することができる。

### 参考文献

- 陳崇凱（2008）『西藏地方經濟史』甘肅人民出版社
- 格勒・劉一民・張建世・安才旦編（1989）『藏北牧民- 西藏那曲地区社会歴史調査報告』中国藏学出版社
- 郭卿友編（2008）『民国藏事通鑑』中国藏学出版社
- 多杰才旦主編（2005）『西藏封建農奴制社会形態』中国藏学出版社
- 吳從衆（1990）「西藏那曲牧区民主改革前的封建農奴制調査」『中国藏学』1990年第3期
- 姚兆麟（1990）「論民主改革前藏族牧区的牧主式經營」『中国藏学』1990年第4期
- 趙心愚・秦和平編（2004）『康区藏族社会歴史調査資料輯要』四川民族出版社
- （本研究は日本學術振興会「アジア・コア」事業からの支援を得た。）